

松下幸之助に学ぶ!!

文・全国PHP友の会

会友 梶浦 洋一

『故きを温ねて新しきを知る』

第二回

(徳島PHP友の会顧問)
(H/PHPA G &
『葉根譚の会』世話人)

新年あけましておめでとう
ございます

気持ちを新たに今年
は力強く積極的なふみ出し
ていきましよう!

景気は気持ちからです。



さて、いよいよ一年後には消費税率を10%に引き上げて社会保障費を捻出する企てが大分、鮮明になってきた。軽減税率問題(1兆円規模の参院選挙向けバラマキ?)も一応の目途をつ

けた。政高党低である。安倍内閣アベノミクスで放った3本の矢がどこを飛んでいるのか判然としていない中、次は【新3本の矢の的】が先に決まったので、急遽、総力結集方式の【新しい弓矢づくり】に動しみ出している。

また、日米安保関連11法案は一まとめで処理をした。日米2国間同盟を中心として、憲法を【解釈変更】するという変則運用で強行採決して『自衛隊の海外派遣』を可能としたようで、臨時国会での開会審議もなしに新年を迎えた。

年初早々の通常国会開会となり、そして今年も参議院選挙へ進む。その後は、自民党懸案課題の『憲法改正』へ向けて着々と布石をしていくのであろうか。

万物は常に
生成発展している

戦後70年は、松翁生誕120年でもあった。その大きな節を越えた今年は、過去を振り返りつつ、前途の難局に向けての『考え方と対処・行動』につながる記述を進めていきたい。

松翁のように先見性に富んだ人の発想は、往々にして凡人より二、三十年は早く察知しているもので、凡人が知り及ぶまでの『時差』は大きい。今年は、そのような話から始めよう。

永年連載されてきた月刊誌『PHP』の連載もの【松下幸之助の歩んだ道・学んだこと】(PHP研究所専務、佐藤悌二郎氏著)は平成二十七年十二月号で完了した。その最終文を紹介しよう。

タイトルは『逝去—この世に思いを残しつつ』である。(正月早々に、逝去とは?)

と訝れる方もありでしょうが、松翁の次の文章を読んで『考え方』を知っていただくこと納得いただけると思う。筆者記)

「万物は生成発展する。万物が変化するという大きな掟には、どうしても抗することができない。われわれ人間の意志がどう働いても、防ぐことができない。シワひとつ寄ったということは、きのうなかったものができたということ、それは発展の姿や。さらに発展すると死んでしまうということや。死もまた発展ということやね。

われわれに与えられておる個人の感情から見ると、肉親と離れるとか、友人と離れるとかいうことは悲しいことかもしれない。しかし人間の感情じゃなく、ものの本当の論理からいくと、生あるものは死し、死は生成発展になっている。だから、ここで生成発展の一段階がすんだというわけや。めでたいことなんや、早くいえば。これは万物流転の

原則であって、進化の道程というわけや。」

（社葬実行員として立ち働いた者の感慨深い思い出があるので、佐藤悌二郎氏の文章も記述して、今後の行動の糧とする。筆者記）

「昭和六十四年、一月七日に昭和天皇が崩御され、平成時代に入ります。世が大きく移り変わったこの年の四月二十七日午前十時六分松下幸之助は九十四年五月の生涯を閉じました。

その日、新聞は幸之助死去の号外を発行、翌日も各メディアで大きく報じられました。四月二十九日に通夜、三十日に大阪市の西本願寺津村別院にて密葬が行われ、密葬の参列者は一万二千人、焼香を待つ人の列は一キロを超えたといいます。

五月二十五日には、大阪・枚方市の松下電器体育館で松下グループ各社による合同葬が行われました。葬儀は読経のあと当時の竹下総理大臣やブッシュ米大統領の弔辞代読、各界代表

からの弔辞弔電の披露、親族らの焼香と続き、告別式へと移りました。雨が降り出すなか（俄かな雷雨に、「天が泣いている・・・」と体感しつつ）筆者記）

献花に訪れる人は途切れることがなく、予定より一時間以上遅れて終了します。計二万人が参列、全世界から届いた弔電は一万一千通以上、民間人としては最大規模の葬儀・告別式となったのでした。

幸之助は晩年になっても常に前向きに、年齢さえ目標にして生きていました。「百六歳まで生きる。一八九四年生まれの自分がその年まで生きたら、三世紀にわたって生きたことになる」「百三十歳まで生きて長寿日本新記録をつくる」。

また満八十歳になったとき、『半寿』の祝いをもらい、「百六十歳まで生きて天寿を全うする」と言っていました。

一方で幸之助は右の言葉のように、『死は生成発展の姿、進化の道程である』

と考えていました。したがって幸之助が生きることに執着したのは、決して死を忌み、恐れたためではありませんでした。混迷を深める世の中を憂い、『このままだと日本は、世界はどうなるのか、心配で死んでも死にきれない』《自分には世のため人のためにやりた

いこと、やらねばならないことがたくさんある。まだ死ぬわけにはいかない》という気持ちを持ち続けていたからです。

世のため人のために

（完）

敗戦の憂き目にあったのが幸之助五十歳の時。翌昭和21年11月。GHQ（連合国軍最高司令官）から7つの制限を受け、公職追放されて、会社経営を満足に遂行できなくなった折に始

めたのが、『PHP運動』であり、PHP研究所を創設した。『人間研究』も始めたのである。

自然の摂理に順応同化した『素直な心』になり、物事の本質をとらえ、物心両面調和のとれた豊かさで、真の平和で幸福な世の中をつくろう！と提唱し始めた。一方、GHQの扱いに納得できず、懸命に制限解除の訴えをし続けた結果、2年

余りで諸制限は解かれた。物資不足で厳しい経営環境の中、事業復興に取り掛かった。しかし、昭和24年には『物品税の滞納王』として公表され、経営は最も苦境に直面した。非常に厳しかった翌25年に、朝鮮動乱が勃発して、無線機などの特需が入ってきた。積極的に対応した。

昭和7年5月、すでに確立していた経営理念と事業の真使命を宣明していたので、一致結束した社業は、勢いづいた。復興へ実践あるのみである！
会社の綱領にいわく。

産業人タルノ本分ニ徹シ
社会生活ノ改善ト向上ヲ
図リ世界文化ノ進展ニ寄
与センコトヲ期ス

その翌年、26年正月の経営方針発表会で松下幸之助社長は『再び開業する心構え』を表明し、初めて欧米を長期視察するに及んだ。翌27年に至り、業容拡大に着手。数年間に業務提携（中川機械、日本ビクター、フイリップス社）や新会社設立（松下電子工業、九州松下電器、大阪電気精器、販売会社設立・全国展開、松下通信工業、アメリカ松下電器）で経済の高度成長の波に乗る。昭和35年正月の経営方針発表会では、5年後に週5日制の導入が示された。

ちなみに、世間の反響は制度導入に【時期尚早】と批判的であった。昭和40年、松下社内は5カ年かけの課題解決で制度導入に成功した。

わが国での導入が一般化したのは60年頃であった。

（つづく）